

# 室町時代の祝言と食文化

——幸若舞曲にみる——

小林 美和

## 1 はじめに

幸若舞曲は、室町時代から江戸期にかけて、わが国で流行した芸能である。古典芸能として今日なお確固たる位置を得ている能や狂言に比して、幸若舞曲は、いわば滅んだ芸能といっただよいであろう。平安時代の白拍子にはじまり、曲舞を経て幸若舞曲へと変転するにつれ、その舞手も稚児や女性から、次第に男性へと移ってゆく。そして、室町期から戦国時代にかけて、この芸能は、大きな隆盛期を迎える。戦国大名の織田信長が、この幸若舞曲を愛好し、永禄3(1560)年の桶狭間の合戦に臨んで、

人間50年、化天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を得て、滅せぬ者のあるべきか…。

という「敦盛」の1節を舞って出陣したというエピソード(『信長公記』)は、よく知られるところである。幸若舞曲の隆盛は江戸期に入っても続き、幸若家は、士分に近いものとしての扱いを受け、代々の将軍に召し抱えられたが、やがて消滅の運命をたどった。

幸若舞曲の内容は、現存50曲の大半が源平合戦などの軍記物を素材としており、『平家物語』をはじめとする先行軍記作品の影響下に成立したものであることは否定できない。しかし、そこに表わされた風俗、生活文化については、明らかに室町時代のそれを体現したものと考えられる点が少ない。そして、それは、室町から戦国期にかけての日本人の精神的状況を映し出したものともいえる。室町時代に醸成され、近世に入って強固なものとなっていく生活文化の様相の反映をそこに読み取ることも可能であろう。そして、それはこの時期に数多く制作された室町時代物語の世界にも通底するものである。

本稿では、このような幸若舞曲の中から主として「浜出」と「九穴貝」という2作品を取り上げ、そこに記された祝言の趣向について言及することにより、この時代の生活文化、とりわけ食文化の一端を明らかにすることを目標としたい。

## 2 幸若舞曲の祝言性

「浜出」と「九穴貝」という2作品は、幸若舞曲の諸作品の中でも、ことに祝言性が濃厚なものであり、内容的にも関連が強く、相互に前編、後編の関係をなしている。ことに、「浜出」は、その祝言的内容に人気があり、江戸期に入って御伽文庫の中に、この作品が取り入れられ

たことは、その証である。

この2作品は、いずれも源頼朝による鎌倉幕府草創期を題材としており、その治世を寿ぐ内容となっている。このような祝言的性格は、すべての幸若作品に共通するものであり、このことは幸若舞曲が本来的に天下泰平を寿ぐ祝福芸であったことに由来する。幸若（曲舞）の徒は、年が明けると禁裏（天皇御所）を訪れ、その芸を披露することにより、天下の平安を祝うことを常とした。たとえば、従二位大納言山科言継の日記『言継卿記』は毎年のように、正月5日前後に行われた演目を書きとどめている。いま、その1例を示せば、

天文 19 (1550) 年正月 5 日	「和田酒盛」, 「那須与一」
天文 20 (1551) 年正月 5 日	「和田酒盛」, 「腰越」, 「百合若大臣」
天文 21 (1552) 年正月 5 日	曲舞三番 (曲名なし)
天文 22 (1553) 年正月 5 日	曲舞 (曲名なし)
天文 23 (1554) 年正月 5 日	「鞍馬常盤」, 「義盛」, 「木曾願書」
(途中省略)	
永禄 6 (1563) 年正月 4 日	「張良」, 「大織冠」
同	正月 5 日 「浜出」, 「烏帽子折」

等々、いずれも現存の幸若の曲目が演じられている。これら幸若の芸能は、新春を寿ぐ芸能として欠かせないものであったことがわかる。なかでも、本稿で取り上げる「浜出」は、この『言継卿記』によれば、上記永禄6年以外にも、永禄8年、同11年の正月にも演じられており、新年の寿ぎにふさわしい曲目とされたことが知られる。

源頼朝による鎌倉幕府の創設は、源氏による日本国支配の始源であり、その射程は、遠く徳川300年の終了時にまで及ぶ。その意味で、新都鎌倉の建設を物語る「浜出」, 「九穴貝」は、国家の起源神話的性格をも備えている。周知のように、室町幕府も源氏政権の継続としてあり、その起源神話としての内容を持つ「浜出」のような作品が、禁裏における新春の寿ぎの芸能としてしばしば演じられたことは、室町・戦国期における歴史認識や感覚を知る上で、興味深いことであろう。

### 3 「浜出」と「九穴貝」の内容

ここで、「浜出」と「九穴貝」について、おおよその内容を摘記しておきたい。

#### 〈浜出〉

「浜出」は別名を「蓬莱山」ともいう。それは、新都鎌倉を中国伝説上の不老不死の楽土である蓬莱山にたとえることに由来している。そして、その内容は、以下のようなものである。

鎌倉は昔、1足踏めばあたり3町が揺らぐという沼地であったのを、和田義盛と畠山重忠が総奉行を命じられて石切・鶴嘴という道具で高地を切り開き、沼地を埋めてでき上がった所である。この地を土地の高低により3つに分ち、最上部には源氏の氏神である正八幡を祀

り、中層部の在家を八つの谷七郷に割った。そして最下層は海である。八つの谷とは、春の梅ヶ谷、夏の扇ヶ谷、秋の笹目ヶ谷、冬の亀ヶ谷等々であり、そのはるか沖には、稲村ヶ崎や飯島、江ノ島が見渡され、噂に聞く蓬莱宮もこれほどではあるまいと思われるすばらしさである。このようなすばらしいところなので、ここに歩みを運ぶ者たちは、いずれも所願を叶えることができるのである。正八幡の近辺には巫女の打つ鼓の音や鈴の音が響きわたり、神をなくさめる神楽の音が止むこともない。

このようなめでたい時に、源頼朝は上洛し、奈良東大寺の大仏開眼供養を執り行われ、その功によって、御自らは右大将に昇進し、兵衛司 10 人、左衛門司 10 人の官途を賜って、それぞれ忠義の臣に下した。中でも、左衛門司を賜った梶原平三景時は、それを嫡子の景季に譲った。源太はこれを披露しようと、急ぎ国元に下向し、各地の大名小名を招待してもてなした。まず初日は、蓬莱山をかたどった飾り物を作り、その中には甘露の酒を入れ、不死の薬と名づけて、銀の棹に金の釣瓶を結びつけて、撥釣瓶でこれを汲むように細工をした。酒にはさまざまの徳があり、疎遠な人も親しくなり、親しい者はさらに親しくなる。あちらこちらからの旅人に馴れ親しむのも酒の徳である。蓬莱の飾り物の上には橘や玄圃梨など、すばらしい味の果物が実をつけ、客人にはさかんに酒が勧められた。また 2 日目は、さまざまの酒肴が揃えられ、引出物として沈香の木片、麝香の臍、鎧、腹巻、太刀、刀、名馬等々がふるまわれた。3 日目は、江ノ島詣でにこと寄せて浜遊びを行った。これには北条政子をはじめ、客人の北の方も参加した。船の上には舞台を高く飾り立て、紫檀や花梨木の銘木を懸け渡し、高欄の先端には擬宝珠を付け、舞台の上には綾を敷き、錦の幕を垂らしたので、それらが浦風に翻って、海上に極楽浄土が出現したかのようであった。祝賀の舞を行うこととなり、各大名やその北の方がそれぞれに管弦の役を引き受け、畠山重保の二男藤石殿をはじめ 18 人の稚児が舞を舞った。舞楽は夜昼 3 日続き、天人が天下り、竜神も浮き上がらんばかりのすばらしさであった。人々はそのすばらしさに酔い、所領を得て所知入りをした。

源氏の治世をことほぐ祝言曲としての性格の濃厚な作品で、同じく幸若舞曲「夢合」「馬揃」などと内容的に響きあうものであり、その構成は、頼朝による新都鎌倉開闢の様子を述べた鎌倉創世譚と鎌倉名所尽しから成る部分（第 1 節）、頼朝とその家人の任官と蓬莱山の趣向を語る部分（第 2 節）、浜出の舟遊びと所知入の部分（第 3 節）からなっている。

#### 〈九穴貝〉

「九穴貝」は、「浜出」における浜遊びの酒肴として、頼朝の命により、若侍たちが海に潜って貝や海藻を献上したという物語で、これもまたきわめて祝言性の濃厚な内容となっている。まず、本間弥二郎が烏帽子を着けたまま海に潜り、辛螺に海松布が付いたものを取り上げ、献上したところ、頼朝は「あっぱれ、祝ひの曲」と褒め、これに豊穰な百町歩の領地を下賜した。これを見た若侍たちは次々と海に潜り、螺・栄螺・海松布・和布などを取り上げ、献上し、それぞれ恩賞を賜った。その中で、畠山六郎重保は、海に潜ったまま 2 時間ほども浮かび上がってこなかった。頼朝は重保の身を案じて搜索を命じるが、父畠山重忠は、これほどの

ことで溺れるような者は武士としてお役には立てない、捨て置くべきだといって笑っている。その後、重保は、どうしたわけか元結を濡らすこともなく、大きな貝を30個身体に取り付けて浮かび上がってきた。それに感じた頼朝は、重保の働きを今日1番の手柄として、重保に盃とともに常陸国鹿島庄かいほつの郷八百町を与えた。重保は一門残らず引き連れて所知入りした。

「九穴貝」は「浜出」の後編をなす作品で、源氏の治世を寿ぐ祝言曲としての色彩が濃い。「浜出」で語られる江の島での舟遊びの趣向として、若侍たちが貝採りをするという内容である。題名となっている「九穴貝」は、「九穴鮑」ともいう。鮑の殻に穴が9つあるもので、これを食べると長命を保つといい、祝言の曲にふさわしい題名といえる。

#### 4 蓬莱山伝説

すでに述べたように、幸若「浜出」は別名「蓬莱山」という。蓬莱山は、中国の東方の海上にあって、仙人が住むという不老不死の霊山であり、この伝説のわが国への流入は、古くに遡る。ことに、日本庭園の源流がこの蓬莱山の造型にあることはよく知られるところであり、たとえば日本の最古の体系的な庭作りの理論書とされる『作庭記』（平安期成立）には、

人家に泉は必ずあらまほしき事也。暑を去ること泉にはしかず。しかれば、唐人必ずつくり泉して、或ひは蓬莱をまなび、或ひは獣の口より水をいだし<sup>1)</sup>とある。

幸若舞曲「浜出」は、新都鎌倉を理想の楽土、この蓬莱山になぞらえるところからはじまっている。

あら面白の谷々や。春はまづ咲く梅が谷、綴喜里や匂ふらん。夏は涼しき扇が谷、秋は露草笹目が谷、冬はげにも雪の下、亀がへが谷こそ久しけれ。遥かの沖を見渡せば、舟に帆掛くる稲村が崎とかや。飯島、江の島続いたり。蓬莱宮と申すとも、いかでこれにはまさるべき<sup>2)</sup>。

これは、鎌倉の景色のすばらしさを蓬莱宮にたとえた歌謡であり、この鎌倉名所尽くしは、幸若歌謡「四季の節」、「禁中千秋万歳歌」、御伽草子「唐糸草紙」等に類似のものがみられ、祝言の歌謡として流布したものと考えられる。

蓬莱山が、理想の楽土として、当時の日本人の生活文化に根付いていたことは、この時期の歌謡や室町時代物語などの庶民文芸にしばしば登場することによって窺うことができる。たとえば幸若舞曲「高館」には、次のような場面がある。文治5年（1189）閏4月27日の夜、奥州平泉の高館では、頼朝の命を受けた義経追討軍の攻撃を前にして、義経主従の別れの酒宴が開かれていた。その酒宴の座興として、武蔵房弁慶が次のような歌を歌い、舞を舞う場面がある。

「蓬莱山には千年経る、松の枝には鶴巢くう、巖が方に亀遊ぶ」。しほり、三頭、鴨の入首、鴨の羽返しをさつとさひて、立ち廻る…<sup>3)</sup>。

さらに、『曾我物語』巻八「屋形まはりの事」には、扇拍子でうたわれた今様として、

蓬莱山には千年経る、千秋万歳重なれり、松の枝には鶴巢食ひ、巖の上には亀遊ぶ、鶴と亀との戯れは、幸ひ心に任せたり、君万歳に坐せば、我ら千秋に候…<sup>4)</sup>。

この祝言の今様は、はやく藤原忠実撰『朗詠九十首抄』の今様として見られ、『源平盛衰記』『祇王祇女伝御前事』、『中古雑唱集』『綾小路俊量卿記』、同「翁」等々に用例が見られる。

「池の汀の鶴亀は。蓬莱山もよそならず」(謡曲「鶴亀」)というように、永遠の楽土、蓬莱山で鶴や亀の群れが遊び戯れる風景がこの時代の人々の脳裏に定着していたことが窺われる。そして、これらの歌謡は、酒宴や祝宴の場で歌われる寿ぎの歌であることに特徴がみられる。

さて、ここで、室町時代の人々が蓬莱山を具体的にどのようにイメージしていたかという点について、室町物語『蓬莱物語』を手がかりにみてみたい。これによれば、蓬莱山は中国の南海上三万里ばかりのところにあり、いにしえ、六つの亀が海中を漂う大山を甲羅に乗せて海上に差し上げてできた島であった。この山は、水晶の台の上に、瑪瑙・琥珀・金銀・白玉など、さまざまな宝石が積み重なってできおり、眩いばかりに光り輝いていた。その後、この山には次々と十方世界の仙人が移り住み、七宝を散りばめた宮殿楼閣を営み、その庭には瑤の池、璧の泉があり、池の中には五色の魚が泳いでいた。そして、池の汀では、鳳凰・孔雀・迦陵頻伽などの鳥が美しい声で囀っている。仙人たちは、「四種の肉芝・五色の更梨・火棗・水瓜」といった珍果を食し、「玉醴・金漿・天上の漿の酒」を飲んで、音楽や舞に興じていた。そして、その一角の長生殿には、不老不死の霊薬が安置されていた。あるとき、紀伊国名草郡の海人、安曇安彦は、舟釣りの最中、強風にさらわれ、蓬莱山に漂着する。七人の妙齡の女仙人に付き添われて蓬莱宮を訪れた安彦は、女仙たちのいうままに、溟海の水に浴すると、肌白く若返り、1粒の薬を服すると、清かな月に向かうような気分となった。さらに、「天の漿、玄圃の梨、崑崙の漿」などを食すると、飛び立つばかりに身体が軽くなった。そして、仙人から長生殿の不老不死の霊薬を与えられ、「東門の瓜、南花の桃、玄雪の煉炭」をみやげに帰郷したところ、時はすでに300年以上も経過していた。安彦は、帝にこの霊薬を献上し、三位の宰相となったが、通力自在の仙人となり、子孫ともども天上の仙宮に登っていった。

以上が、室町物語『蓬莱物語』のおよその内容であるが、類似の説話は同じく室町時代物語『不老不死』などにもみられる。この時代の人々が蓬莱山について、どのようなイメージを抱いたかを考える上で、参考になると思われる。それは、単に鶴や亀がのんびり遊んでいる自然の風景ではなく、ありとある宝石によって装飾された燦然たる宮殿であった。そして、そこでは、仙人たちがこの世のものならぬ珍果を肴に美酒を飲み、歌舞をこととして遊び戯れている。室町時代の人々の現世享樂的な理想の楽園がここに描かれているとってよいであろう。

このように考えると、室町的生活文化を彩る蓬莱飾りの世界の意味が浮かび上がってくる。以下、この点について幸若舞曲「浜出」を中心にみてみたい。

## 5 蓬莱飾りの展開

蓬莱は中国で当方の海上にあって仙人が住む不老不死の地とされる霊山をいうが、この蓬莱山をかたどった正月の飾りを蓬莱飾りという。蓬莱飾は三方の上に一面に白米を敷き、中央に松竹梅を立て、それを中心に橙、蜜柑、橘、かち栗、ほんだわら、柿、昆布、海老を盛り、讓葉、裏白を飾る。これに鶴亀や尉姥などの祝儀物の造り物を添えることもある。京阪では正月の床の間飾として据え置いたが、江戸では蓬莱のことを「喰積」ともいい、年始の客にまずこれを出し、客も少しだけこれを受けて一例してまたこれを受けて一礼してまたもとの場所に据える風があった。蓬莱の飾物を少しでも食べると寿命がのびると信じられたのであった<sup>5)</sup>。

ここに説明されるように、一般に蓬莱飾りは、正月を祝う縁起物として広く庶民の生活文化に根付いていた風習である。しかし、本来は正月に限らず、祝祭の場の縁起物として飾られたものであり、その例は平安期まで遡り得る。すなわち、蓬莱山をかたどった台上に、松竹梅や鶴亀、尉姥などを飾って、祝儀や酒宴の飾り物としたものである。

さて、幸若舞曲「浜出」には、梶原源太が催した酒宴の趣向ととして、蓬莱をからくんだとあり、室町期における蓬莱飾りの具体相を窺うことができる。

先ずはじめの雑掌には、蓬莱の山を絡組み、中に甘露の酒を入れ、不死の薬と名付け、銀の竿に金の釣瓶を結び下げ、撥釣瓶にて是を汲む。酒に数多の威徳あり。疎き人さへ近付き、親しき仲は猶親しむ。遠近のたつきも知らぬ旅人に馴るるも、酒の威徳なり。蓬莱の山の上には、李夫人が橘、玄圃の梨、巢父の椎、かかくが柚、とうなんせいの栗と榲、みないろいろになりつれて、其の味はひは、乳味を成す。誠に不死の薬ぞと、酔をすすめて参らする。

ここでいう雑掌とは、饗宴の酒肴のことである。これによれば、蓬莱山をかたどった本体に酒を入れ、銀の竿に金のつるべを取り付けて、撥ね釣瓶の細工をほどこして、酒を汲んだとある。そして、蓬莱の山の上にさまざまな果物を植え付け、これを肴としたとある。すなわち、この記述によれば、蓬莱飾りは、後年のように単なる飾り物ではなく、酒器としての用途を持ち、実際に果物を食したということになる。さらに、この場面が大勢による酒盛りであることから、ここで組み立てられた蓬莱山は、相当のサイズであったことが想像される。そして、ここで登場する種々の果物は、いずれも蓬莱山で実るとされたものらしく、前述の室町物語『蓬莱物語』に登場する果物と共通する点がある。因みに、人見必大の『本朝食鑑』（元禄5年刊）は、玄圃の梨について、これをしんく積榎のこととし、一寸ほどの鶏の爪のような形の実を結び、嚙むと熟れた梨のような味がするという。

また、同じく幸若舞曲「鎌田」では、さらに大規模な蓬莱飾造成が物語られている。

我君の是までの御下向を一期の面目、優曇華と存知、蓬莱をからくみ、君を祝ひ申さんため、蓬莱の下組に魚と鹿がいることにて候程に、5人の子どもをば、三河の国足助の山へ

鹿狩に越し候ひぬ。また内海の沖に大網を下して候が、奉行にはつたこと欠いて候。若き時の遊びに獵、漁と申して、苦しからぬことなれば、奉行にたつてたべかし<sup>6)</sup>。

長田莊司が金丸をたばかる場面であるが、この記述によれば、蓬莱をからくむ、その下組みとして、実際に三河足助の山、内海の海に、それぞれ鹿と魚を獲りに行くところある。この記述のみでは、その内容は必ずしも明らかではないが、これも中世の芸能、説経節の『小栗物語』に、その参考となる記述がある。それによれば、広庭に蓬莱山を飾り、生きた鹿と魚を放したところある。そして、蓬莱山の中に酒の銚子をからくんだとする。おそらくは、広庭に蓬莱山を造って鹿を放し、さらに池を掘って魚を入れたものと考えられる。とすれば、これは、単なる飾り物というよりは、造園に近いものと思われる。

このようにみると、この時代の蓬莱飾りは、江戸期以降の正月の縁起物としての蓬莱飾とは、そのスケールと質において、かなり様相が異なる面があることに気付かされる。中世の人々は、永遠の楽土蓬莱山を目前に再現して、そこの住人たることを擬似的に体験したものと考えられる。そして、蓬莱の山に仕込んだ甘露の酒を不死の霊薬として、これに酔ったのである。

## 6 九穴の鮑<sup>あわび</sup>

すでに述べたように、幸若舞曲「九穴貝」の曲目名となっている九穴貝は、別名「九穴鮑」ともいう。鮑の殻に穴が9つあるもので、これを食べると長命を保つといい、その意味で、祝言の曲にふさわしい題名といえる。矢野憲一氏<sup>7)</sup>によれば、鮑の貝殻に穴が7つ、または9つあるのを七孔螺、九孔螺、九孔貝といて、特に9穴あるものを珍重し、食べれば永遠の生命が授かるという伝説があり、これは、元来中国の俗説に基づくものという。

さて、鮑は食用・神饌のほか貝殻を装身具に用いるなど、古くから日本人に親しまれてきた。「延喜式」では、調・中男作物・贄として多くの国から貢進されていた。神事において鮑は必須のもので、各神社はそれを確保する体制を整えていた。伊勢神宮は相模国の大庭御厨をはじめ、伊勢・志摩に多数設定した御厨から貢納させていた。鮑は包丁で薄くむいて乾燥させる熨斗鮑として使用されることが多かった。伊勢の国崎では、現在でも熨斗鮑作りが行われ、伊勢神宮に奉納している。室町期には武家の年頭儀礼において三方の上に熨斗鮑・昆布・勝栗の3種が置かれる慣習があった。戦国時代には戦陣の際に縁起物として鮑が贈られ、祝儀の物としての性格を強め、さかんに贈答された。現在、贈物に熨斗をつける習慣は贈答品としての鮑に由来する。室町期から近世にかけて活躍した伊勢御師は土産に熨斗鮑を持参しており、熨斗が全国的に広まったのも伊勢御師によるところが大きい。なお鮑を祀る神社が各地にみられる。近世には鮑は中国への輸出品として煎海鼠・鱻鱈とともに俵物貿易で重要となり、江戸幕府は各漁村から強制的に買上げ独占を計り、同時に増産を強制した。鮑は深い岩場に生息するため潜水漁法でとられる。一般に鮑の生産地と海女の所在地は一致しており、伊勢や安房の海女は現在でも活躍している。一方、船に男性が乗って海面から簞などの突具でとる見突き漁

もある。鮑の殻を軒先につるして魔除けにする民俗も全国的にみられる<sup>8)</sup>。

また、熨斗鮑については、アワビの肉を薄く剥ぎ、乾燥して伸ばしたものを他人に進上する品で祝儀の贈り物に必ず添える習慣が古くからあった。『肥前国風土記』には熨斗鮑の製作の話がある。『吾妻鏡』にも1192年(建久3)条に「長鮑1050帖」が年貢として大将家へ送られていて、古くは水に漬けてやわらかくして煮て食べれば精がつき長寿になるという保存食で、最高の贈答品であった。そして戦国時代には武運長久を祈る陣中見舞として喜ばれた。現在では紅白の色紙を、上が広く細長い六角形にして細く黄色っぽい紙をその中に張り付けたり、印刷したり、省略して「のし」と書く。この紙がアワビの代用である。のしの起源は古代中国の東脩(乾肉の贈答品)だと考えられるが、日本では海の幸のアワビには不老長寿の伝説があり、古代から長生きを祝うめでたい食品とされてきたから、それを添えて飾ることで、長命を祈る祝福のしるしとなった。なお、のしとは火熨斗の略でもあり、布の皺などを伸ばす道具のことでもある。のしは伸ばす、つまり生命を伸ばす、身代を伸ばすという語の近似から意味を感じてきたのだと考えられる<sup>9)</sup>。

以上の点を踏まえて、以下、幸若舞曲「九穴貝」についてみてみたい。謡曲「九穴」では、由比ヶ浜での頼朝と梶原の会話に、「九穴の玉」の説明として、「廻り九尋の貝に、九穴の星あり。此玉を納め都安全にして人の齢を保ち、万何事も心のまゝなるとこそ申し候へ」とあり、また、「九穴は九曜の星を表せり。ひらくる時には、金剛胎蔵の両界をあらはせ。此玉を一たび守護する人は、現世にては怨敵を亡ぼし齢をたもち、来世にいたれば、無為安楽に生まるべし」ともみえ、これを「九穴の貝」とも称しているところから、九穴の貝と九穴の玉は共通のイメージを持ったものと考えられる。『源平盛衰記』3では、後白河法皇の熊野御幸を記すに際し、花山天皇の故事を紹介する。即ち、天皇の那智参籠の験徳によって竜神があまくだり、「如意宝珠一顆、水晶の念珠一連、九穴の鮑」を天皇に奉じた。九穴の鮑は滝壺に放たれたが、白河院御幸の時、海人に潜らせ、取り上げたところ、鮑は、「傘ばかり」の大きさがあつたというものである。また、謡曲「九穴」でも、九穴の玉は、竜宮界の竜神のものとされている。

本作品のハイライトは、畠山六郎重保が海に潜ったまま2時間ほど後に元結も濡らさずに大量の貝を携えて浮上するという件であろう。重保を潜水の名手とするのは、偶然の設定ではなく、謡曲「九穴」にも、「秩父の六郎殿は五とくの錦とやらんを持たせ給ひ、海中をば心のまゝなる由とこそ申し候へ」などと、その名手ぶりが語られている。さらに、同曲には、頼朝の舟遊びや梶原の奉行で六郎が九穴の珠を取ってくる場面などがあり、幸若舞曲の「九穴貝」との構想上の類似性が感じられる。また、謡曲「九穴」や御伽草子「頼朝之最期」には六郎の竜宮行伝説がみられる。「頼朝之最期」では、六郎が頼朝の殺害者となっており、後継者頼家に仇として命を狙われて、竜宮城に逃亡し、四百年を経て未だ戻らないなどとしている。

さて、九穴の鮑が、いかに祝言の場にふさわしいものであつたかを示す例を、もう1つ幸若舞曲「夢合わせ」によってみてみたい。この作品は、「浜出」や「九穴貝」と同じく、幸若の中でもことに祝言性の濃厚なものである。その内容は、源頼朝の部下安達藤九郎盛長が見た



夢に対し、同じく源頼朝の部下大庭平太景義が夢合わせをするというものである。

その中の夢の1つに、九穴の鮑が登場するものがある。すなわち、頼朝が右の足を鬼界が島に踏み降ろし、左の足を外の浜に踏み降ろしているところに、景義が蝶形に口を含ませた白い瓶子と九穴の鮑を持って参上、頼朝が鮑を手に持ち、酒をなみなみと注ぎ、法師に命じて舞を舞わせた。景義は、この夢を頼朝の日本国制覇の吉兆と占った。

大庭の平太景義、白き瓶子に蝶形に口包ませ、肴に九穴の鮑をもつて御前に参る。君は御覧じて、鮑の太き所を御手に持たせ給ひて、酒をたぶたぶと御控へあつて…<sup>10)</sup>。

瓶子は酒を入れて注ぐ容器であり、蝶形とは、祝儀用の瓶子の口を蝶の形に折って包むものである。酒と鮑という取り合わせは、幸若諸作品が作られた時代の、祝言の場における献立の典型であった。

また、この物語に関連して、『平治物語』（学習院本）には、八幡大菩薩の使いの天童が66本の熨斗鮑を持参し、大菩薩の命ずるままこれを食したとする説話が見られる。すなわち、この66本の熨斗鮑は、かつて頼朝の父義朝が奉納した66本の弓矢であり、頼朝が日本全国66州を制覇することの瑞兆であったという。

最後に、中世における熨斗鮑の摂取の例を、もう1つ紹介しておきたい。中世においては、饗宴のはじめに初餐といって熨斗鮑が最初の肴に用いられる例が多い<sup>11)</sup>が、『徒然草』216段には、北条時頼が足利義氏の館を訪れた時のもてなしとして、「一献に打ち鮑、二献に海老、三献に搔餅」とある。打ち鮑は熨斗鮑、搔餅はばた餅のことである。

## 7 結 び

以上、室町時代から戦国期にかけて流行した芸能、幸若舞曲を素材として、この時代の祝言のあり方と食文化の一端についてみてみた。そこには、この時代の日本人の生活文化やその基盤となる精神的な風土が確実に映し出されていると思われる。時代の状況は、混沌として移り変わりが激しい一方で、或いは、それがために一層晴れがましい祝言の場を求めたといえるのかもしれない。大掛かりで華麗な蓬莱飾りは、寿ぎの精神の表現であると同時に、理想の世界、永遠の楽土の具象化であり、人々は、その中で、甘露の酒に酔い、祝言の歌謡を歌った。そして、かつて柳田國男<sup>12)</sup>が言及したように、九穴の鮑は、人々を無限の生の幻想へと導いたものと考えられる。

### 注

- 1) 『作庭記』の引用は、岩波日本思想大系『古代中世芸術論』所収のものにより、読みやすくするため表記を一部あらためた。
- 2) 引用は『幸若舞曲研究』第六巻により、適宜表記を改めた。
- 3) 引用は『幸若舞曲研究』第八巻により、適宜表記を改めた。
- 4) 引用は東洋文庫版、真名本『曾我物語』により、適宜表記を改めた。
- 5) 平凡社『日本歴史大事典』「蓬莱」項による。

- 6) 引用は、『幸若舞曲研究』第二卷所収「鎌田」により、適宜表記を改めた。
- 7) 矢野憲一『鮑』法政大学出版局参照。
- 8) 以上、鮑については、主に平凡社『日本歴史大事典』の「鮑」の項によった。
- 9) 以上、熨斗については、主に吉川弘文館『日本民俗大辞典』「熨斗鮑」の項によった。
- 10) 引用は、『幸若舞曲研究』第六卷により、適宜表記を改めた。
- 11) 矢野憲一『鮑』法政大学出版局参照。
- 12) 柳田國男「東北文学の研究」『定本柳田國男集』第七巻。